

第2回特定複合観光施設(IR)に関する有識者懇談会 議事録

日時：平成30年8月30日（木）14:30～17:00

会場：TKP札幌ビジネスセンター赤れんが前
「すずらん」

1 開会

■本間観光振興監

それでは、定刻となりましたので、ただいまから第2回特定複合観光施設・IRに関する有識者懇談会を開催いたします。初めに前回所用のため欠席されておりました北海道経済連合会常務理事小林良輔様にも今回の懇談会からご参加いただいておりますので、よろしくお願いいたします。

■小林 良輔 氏

前回どうしても外せない予定がございまして、欠席をさせていただきました。2回目から出席させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

■本間観光振興監

本日の懇談会では、まず前回のご議論の振り返りの後、議題の一つ目といたしまして、前回のテーマであります「北海道IRの基本コンセプト」につきまして、皆様のご意見を踏まえ、事務局にて考え方を整理いたしましたので、資料で説明させていただいた後、改めてご意見をいただければと思います。

次に議題の2つ目といたしまして、「優先すべき候補地」のご検討をしていただくこととしておりますが、本日は、道内で誘致表明をしております3地域の自治体の皆様にもお越し頂いておりますので、ここでご紹介させていただきたいと思います。

まず、釧路市産業振興部 観光振興監の菅野隆博様です。

次に、苫小牧市総合政策部国際リゾート戦略室 室長の町田雅人様、同じく主幹の成田晃様です。

最後に、留寿都村企画観光課 参事の浦城敦史様です。

4名の方々、よろしくお願いいたします。

進め方といたしましては、事務局から3地域の概要などにつきまして、ご説明をさせていただいた後、3地域の皆様からそれぞれの取組状況等をご説明いただき、時間の許す限り、質疑を交えご議論いただきたいと思いますと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日は西村委員、矢ヶ崎委員は所用のため、欠席となっておりますのでご承知おきいただきたいと思います。

それでは、これより先の進行は、小磯座長にお願いいたします。

2 議事

(1)第1回テーマに関する方向性の確認(基本コンセプトのまとめ)

■小磯 修二 座長

それでは、第二回目の有識者懇談会ということで、よろしくお願いいたします。

先ほど本間さんからご説明がございましたが、本日は議題が二つございます。前回ご議論いただきました北海道 I R コンセプトについて、改めてまとめを行うということ。二点目が優先すべき候補地ということで、盛りだくさんの内容でございますが、終了は 17 時 10 分頃を目安に進めてまいりたいと思います。ご協力をよろしくお願いいたします。

まず最初に、第 1 回のテーマに関する方向性の確認ということで、前回の振り返りと前回皆様方からご意見をいただきました、その考え方を踏まえた基本コンセプトについて、事務局から説明をお願いいたします。

■榎誘客担当局長

観光局の榎でございます。よろしくお願いいたします。座って説明をさせていただきます。

お手元に配布しております資料 1 をご覧いただければと思います。前回、第 1 回懇談会の概要を簡単にまとめたものでございます。前回 I R の基本コンセプトについて事務局で作成した資料をもとにご議論いただきまして、主な意見がございますとおり、I R 導入の意義、I R に求められる機能・施設、またおめくりいただき導入に当たっての課題、さらにギャンブル依存症対策への対応、こういった全般的な事項に関しまして貴重なご意見を拝聴させていただいたところでございます。個々のご意見については時間の都合上省略させていただきますが、これからお示しいたしますたたき台の中で、こうした皆様のご意見を反映させていただいたところでございます。

それでは資料 2 をご覧いただけたらと思います。前回お示しいたしました検討資料をベースといたしまして、先ほど申し上げましたとおり皆様からいただきましたご意見も踏まえより明確なコンセプトのイメージを今回たたき台として整理させていただいたところでございます。

まず、1 ページ目でございます。I R 導入の意義及び着眼点ということで、前回も意義あるいは効果等について皆様からご意見をいただきました。I R はインバウンド観光のさらなる起爆剤となるというご意見、また今後の観光振興の重要な手段であるというご意見をいただきました。そのような部分を踏まえまして、今回改めて私どもで日本型 I R についてその意義を整理させていただいております。前回も申し上げましたが、I R はカジノに注目が集まる傾向にございますが、国が進めようとしております日本型 I R は下の図にもございますとおり、M I C E 機能を中心として多種多様な集客・送客機能を一体的に整

備して、観光の国際競争力を高めていこうと、そうした目的がございます。そうした I R を北海道に導入する場合、インバウンド・国外市場のさらなる拡大、北海道特有の問題であります観光需要の季節格差・地域偏在の是正、そうしたものと共に間接的な効果といたしまして、地域雇用の改善ですとか、地域経済の底上げといったものが期待されるところでございます。一方でこの I R には、I R 施設全体の収益の原動力としてカジノと一体的に整備するということがございます。このカジノ設置に関しては、まだ様々な懸念がございます。特にギャンブル依存の問題、青少年の健全育成、こういった問題は道民の皆様にもまだまだ懸念がございます。こういった影響の最小化を図っていくことが、北海道に I R を導入することの前提となるような形で整理をさせていただいております。前回座長からもプラスマイナスの効果分析というものをしっかりという話もございましたが、まさにこうした効果と影響の分析というものが今後必要となるかと思っております。

2 ページ目をご覧くださいと思います。特に効果の部分で精緻な効果分析が必要とのご意見をいただきましたが、なかなか今の段階では精緻な部分ができせんので、前回お示ししました需要予測を前提に簡単な経済波及効果を試算してございます。前段が前回お示した需要予測で、後段がそれを踏まえた経済波及効果となっております。この前提となる最終需要額と書いておりますが、これは I R の売上高をベースにしたものでございます。ですから、建設投資についてはここには反映されていません。それをベースに直接、一次、二次の経済波及効果を試算したところ、例えば最も効果の高いとされる苫小牧市であれば、年間約 2,000 億円の経済効果が、就業誘発数については 2 万 1,000 人という、これは本当に粗い試算ではございますが、こうした数字を見ても道内経済に大きなインパクトをもたらすことがこの I R には期待されるところです。今後、候補地の特定あるいは I R の機能の特定、こうしたものを通じてより精緻な経済効果の分析もしていきたいと考えております。

3 ページ目が影響対策の方向性でございます。この問題についても、先ほど申し上げましたとおり、前回のご議論の中で例えば西村先生からは、社会的な影響を最小限に食い止める必要性、それがひいては地域発の文化コンテンツになるというお話でした。また、稲村先生からは余暇の使い方、あるいは健康なお金の使い方、これはギャンブル依存症対策の根本的な問題であるというお話もいただいたところでございます。そうした部分を踏まえて、我々で今後の対策の大枠を整理させていただいております。図を見ていただきたいのですけれども、大きく分けて二つの施策の方向性、一つは I R に特化したカジノに関する依存症対策、もう一つは既存のギャンブルを含めたギャンブル全般に関する依存症対策でございます。これらを両輪で進めていくということでございます。カジノでの依存症対策に関しては、色んなご意見がありますけれども、現在国で定めている水準の規制は、世界あるいは既存のギャンブルと比較しても、高い水準ではないかと思っております。それをどういう形で実行性を高めていくかが、事業者また地元の私どもの取り組みの方向性であると思っております。ギャンブル依存症全般に関しては、これも先般の国会で基本法が成立い

たしましたが、それをもとに今後国で作られる基本計画、それに基づいた北海道の取り組みという流れになってきますが、これらを両輪で進めていくことによって、北海道発の依存症対策モデルを構築していくべきと考えております。こうした取り組みの財源に、I Rを導入した場合はカジノ納付金等を有効に使えるのではないかと整理をさせていただいております。具体的な取り組みの方向性については、次回以降この懇談会でもご意見を伺えたらと思っております。

4 ページ目以降でございます。ここからは北海道に相応しいI Rの機能・施設ということで、負の影響対策を確実にやることを前提に北海道でI Rを導入する場合、どのようなI Rを目指すべきかという形で整理をさせていただいております。前回の議論の中でも、特に北海道の誇れる大きな資産である北海道ブランド、これをどのようにこのI Rの中でとらえていくべきかというご意見、また特に諸外国の皆様が北海道に自然環境を求める、これがI Rによりマイナスイメージになることも留意すべきだとのご意見でございました。こうした部分も踏まえまして、私ども北海道の優位性を存分に活かした、特に注目をいただいておりますアジアの方々からより大きな注目を集めるためにも北海道の価値を伸ばしていくということ。そうした部分を基本的なコンセプトに置いて、何度でも訪れたい魅力ある空間を作っていく。もう一つは北海道全体をI Rと見立てることも可能であります。そうした部分も含めて、I Rを拠点としてより北海道らしい周遊観光を目指していくような、基本コンセプトを設定したところでございます。そういう基本的な中で、国が日本型I Rで求める4つの機能ごとに方向性のイメージを作っております。

5 ページ目でございますが、まず一つ目にM I C E施設でございます。これにつきましても、本日欠席されておりますが、前回矢ヶ崎先生から特にI Rの中でM I C E機能が重要だとのお話で、この構築がないとI Rの導入理由そのものが問われるということ、特に顧客ターゲットを明確にすべきだとのお話がございました。今回別の参考資料としてM I C E関連データというものを作っております。どういったターゲット戦略が必要かということで、とりまとめたものでございます。時間の都合で説明を省略させていただきますが、M I C Eのデータは体系的なものが今ございませんので、そうしたデータ収集からスタートしなければいけないのですけれども、世界的に言うと国際会議は、着実に増えていると。ただ、それを日本に引っ張ってくる、あるいは北海道に引っ張ってくるというシェアで見ますと、横ばい状態が続いているということで、実際に数は増えているのですが、こういった好機にもっと確実にシェアを伸ばしていく可能性は当然あるということでございます。また、ミーティング・インセンティブという側面で見ますと、東アジアの企業によるインセンティブツアーがここ数年で非常に大きな伸びを示しております。そうしたものを北海道がいかに取り込んでいくかも今後の課題だと認識しております。そうしたターゲットを置きながら、受け皿としてどういった施設が必要かということでこの表にとりまとめたございます。

次のページ、これもM I C Eの関連でございますが、ソフト面の誘致戦略として、I R

の中にMICE機能を置いた場合、北海道全体としてどういったMICE誘致戦略が考えられるかということです。現在私共道内の各都市の皆さんと連携して、北海道MICE誘致推進協議会を持っております。そこで地域連携の様々な誘致活動をやっておりますが、IR導入後については、IR立地自治体、IR事業者もこの構成員に加えてより強力な誘致活動が展開できるのではないかと考えております。札幌にも新しいMICE施設を造る計画がございます。こうしたものを持ち寄り、総合力でこれまでにない大規模な会議、あるいは多種多様なニーズに応える受け皿を作っていくことが必要ではないかと考えております。

続きまして宿泊施設、7ページでございます。ここもMICEと一体的な部分でございますが、今まで北海道ではどうしても世界のVIPあるいは富裕層のニーズに応えるようなハイグレードなホテルが少ないということがございます。そうしたグレードの高いホテルを中核に、一方でビジネスですとか観光客など様々なニーズに応えられる規模も満たしているような宿泊施設、さらに北海道ならではの自然志向の体験型の宿泊施設、そうしたものを組み合わせてMICE施設と一体的に整備をしていく方向性が一つ考えられるのではないかと思います。

続きまして、ショーケース機能。これは国で日本全体の魅力を発信する機能を今回は持つようにということで、私共北海道は国土の5分の1以上を占めており、まずは北海道全体の魅力発信をIRの中でやっていく必要があると思っております。特に先ほど申し上げました北海道の優位性、食でありますとか自然でありますとか、歴史・文化、こうしたものをIRの中で丸ごと体験していただけるようなショーケース機能を作っていくことが考えられるのではないかと思います。そうすることによってより北海道の各地域に興味を持ってもらって、それが北海道各地の本場本物の体験につながっていくと。こちらの例はゲートウェイ機能にもつながる部分でございますが、そうした波及効果の高いIRを目指していくという方向を整理させていただいております。

最後にゲートウェイ機能でございます。ここは私共が最も重視している部分で、IRの導入効果というものをIR地域内に限定するのではなく、広く北海道あるいは日本全体にその効果を波及させていく必要があると考えております。IRに集客するための機能、先ほど申し上げましたMICEでありましたり、宿泊機能であったり、ショーケースであります。そうした形で集客をした皆様を道内あるいは国内に送っていくような、そうした機能もIRの中に持たせていく必要があるということでございます。具体的にはハード面の整備、あるいはソフトの対応という両面からのアプローチが考えられますが、ハードについては、IRから道内各地への二次交通の強化という部分を重視したいと。特に陸海空の交通事業者と連携して、基幹となる二次交通を強化していく。現在やっております道内空港コンセッション、そこでの事業者ですとか、あるいはJR北海道ですとか、そうした本道の基幹となる交通事業者と連携しながら、二次交通を強化していく方向性が一つ。もう一つは、プライベートジェットやヘリコプター、リムジンバスなどこれまでになかった

移動手段を I R の中に設けて、より高い V I P のニーズにも応えられる移動手段を持っておくという方向性です。また、ソフト面で言いますと、周遊観光のワンストップサービス機能ということで、旅の手配ですとか旅行商品の開発ですとか、そうしたものをワンストップで行うコンシェルジュ機能を I R に機能の一つとして持たせていく方向性でございます。こうしたことで I R 自体の活性化とともに全道へ導入効果を波及させていくという両面からの I R の可能性に私共も今後さらに検討を進めてまいりたいと思っております。

今回お示したのはあくまでも道のイメージということで、今後皆様のご意見をいただきながら、このコンセプトをさらに道の考え方としてまとめてまいりたいと考えておりますので、よろしく願いいたします。説明は以上でございます。

■小磯 修二 座長

北海道 I R の基本コンセプトについては、前回北海道からご説明いただいた内容について、この懇談会の場で皆さん方から色々なご意見をいただきました。それを踏まえて改めて道の報告としてこういう考え方を示されました。今後の色々な議論につながっていきますが、最低限これだけの考え方を押さえておいてということでご意見をいただきながら、この会を進めてまいります。各委員の方から今回ご説明のありましたコンセプトの中身について、ご感想でも結構ですけれども、ご意見・ご質問いただければと思います。

■石井 至 氏

M I C E の件ですが、データがなかなかないというお話ですが、参考資料 M I C E 関連データで、1 ページ目 2 ページ目に開催実績の推移、あるいは 3 ページ目に分野の開催別の状況等あるんですけども、世界的にみると M I C E の大きい会場は、1 回に 1 万人でできるのを 3 か所持しているとか、そういうレベル、大きいところは。だけど必ずしも大きいものを狙う必要もなくて、どのくらいの規模のところを中心に、狙っていくのかがわかるとよいなど。日本で開催されているものでも、例えば 30 名以上とか 50 名以上のものを選んでいて書いていますが、そのうち 100 名までのところが何件とか、100 名から 300 名くらいが何件とか、規模感で一番北海道がやりやすいところで、そこそこマーケットがあるところを目指していくべきだと思うのですが、今はないのはわかるのですけれども、そういうところの資料が何かあると良いなと思いました。

■稲村 厚 氏

依存症対策の整理の仕方は、これでよろしいかなと思っておりますが、特に現状の依存症対策のところ、段階に応じた有効な依存症対策は、地域での生活支援、要するに生活が乱れるというのが、その現象であり、それをどう克服するか、構成し直すかというのが、現場で実施されるべき対策であると考えています。次回以降の検討となっておりますので、次回私の方で具体案を整理させていただいて提出させていただきたいと思っております。

■小磯 修二 座長

次回はよろしくお願いいたします。

■落合 周次 氏

先進国でカジノがないのは日本くらいなもので、カジノの日本の会社もなくて、ラスベガス・アメリカ系のカジノ、オーストラリアに行きましてもゴールドコースト、ヨーロッパ型のカジノも考え方が違う。よその事例を色々参考にしながら、北海道に本当に合ったカジノを作るのであれば、そういうものを作るようにしたいなど。

■河本 光弘 氏

北海道IRの基本コンセプトは、非常に良くまとめていただいているかと思います。あと少し気になりました点があります。たぶんこれから加わっていくのかもしれませんが、例えば、2万1,000人の就業誘発される人数が説明資料の2ページ目に載っていますが、それらの人材確保・育成・誘致について、IRですと、ゲーミング関係の人は当然として、MICEでの大型会議や展示会、イベント関係とか多様な人材が必要になってくると考えます。それら人材確保・育成や誘致についての対応というものもIRが中心となり担っていくのかなと思いますので、コンセプトのどこかに入れていただけたらと思います。

■小磯 修二 座長

今の点は資料の2ページのところです。従来型の経済波及効果の計算は、生産誘発額それから就業誘発の人数を大きく出すと効果があるという議論が一般的だったのですが、これからの捉え方というのは、どういう人材をどれだけ賄っていくのか、取り巻く状況が変わってきています。そこの示し方を今のご指摘の点を踏まえて少し作業をしていただければと思います。

■小林 良輔 氏

最近気づいたことは、IRに関する住民の正しい理解が非常に重要なのかなという考えであります。特に報道等において、カジノ法ですとかあるいはギャンブル依存症といったような表現や、そうした懸念などが非常に大きくクローズアップされているところであります。もちろんこういった点については、十分に議論あるいは研究をして必要な規制、監視体制、対策を講じているものだと思いますけれども、IRの目的において議論いただいているとおり、観光ですとか地域経済の振興に寄与するとともに、財政の改善に資するといった点が挙げられますし、適切な国の監視ですとか管理の下で運営される健全なカジノ施設の収益が社会に還元されることが、基本理念になっています。従いまして、地域経済の振興ですとか、地域社会への収益還元のメリット、こういったものも併せて十分に住民

に説明すべきでないかなと思います。それから、カジノに関する諸規制が十分に整備され、依存症に万全の対策を講じるということを含めて、客観的なかつ適切な情報提供が非常に重要であるということにつきましては、私ども北海道経済連合会、例年夏に中央省庁に色々な要望をしておりますけれども、そちらにも反映をしたところでございます。

もう一点、基本コンセプトの最後の方の説明にもございましたが、北海道らしい魅力あるIR施設によって滞在型観光を推進するというところでございますが、一方で全道に送客をして広域的観光振興を図ることも非常に重要だと思います。難しいのですが、滞在と送客の両立を図っていかねばならないということですが、これは北海道型IRに必要なとされる極めて重要なポイントと考えております。

■町野 和夫 氏

全体としてはかなりプラスの面が大きいことがよくわかるのですが、2点ほど。一つは季節格差や地域偏在の是正に効果が認められるということですが、どこが選ばれるのかにもよるのですが、さらに地域偏在が強くなる可能性があり、あるいは、季節格差も、学会などは夏に北海道で開催されることが多く、それはむしろ季節格差を高める可能性もあります。そうした効果をどう考えるか、あるいはそうならないようにどうするかも、少し考えてみるべきだと思います。

もう一つ、経済効果のところでは今回の試算には建設投資は入っていないのですが、一応民間主体でやるとはいっても公共インフラとかそういうコストがかかると思うので、それがどれくらいになるのか、あるいはギャンブル依存に対するいろんな取組みをし、施設も作るわけですから、その辺のコストもどれくらいになるか考えてみたらどうかと思います。

■小磯 修二 座長

皆様方から他にご意見や感想はございますか。特に無いようでしたら、今回お示しいただいた資料に基づいて、引き続き事務局のほうで基本コンセプトについては検討を進めてもらうということをお願いしたいと思います。

(2)優先すべき候補地について

■小磯 修二 座長

それでは、本日のメインのテーマであります「優先すべき候補地」ということで、本日は三つの自治体から担当の方にお越し頂きましてありがとうございます。まず各自治体からご意見をお聞きする前に、北海道から全体の取組をご説明願います。

その前にこの懇談会として優先すべき候補地について、どういう姿勢で議論するかということについてお話しします。まずこの懇談会は3地域の優劣を決める、決定するという立場ではないという点です。その点は、第1回の冒頭で知事からもお話がございましたけ

れども、あくまで北海道が優先すべき候補地を判断される際に、我々の専門的立場からの意見あるいは意見交換の内容を通じて、検討材料の一つとされるということです。そういう立場で皆さんと議論を深めていければと考えておりますのでよろしく願いいたします。

それでは道庁から、優先すべき候補地について、説明をお願いします。

■ 横誘客担当局長

それでは引き続きご説明させていただきます。資料3をご覧くださいと思います。詳細のご説明については、3地域の皆様方からあると思いますので、事務局からは、3地域横並びの基本情報、あるいは今後候補地検討に当たって着眼すべき点についてご説明させていただきます。

1 ページ目、2 ページ目については、3地域の位置でありますとか、地勢であります。4 ページ目はこれまでの3地域の取り組み状況の概要です。この辺については、後ほど各地域の皆様から説明があると思いますので、省略させていただきます。

続きまして、3 ページ目、4 ページ目、5 ページ目、それぞれの候補地の詳細情報を載せております。順に釧路、苫小牧、留寿都となっておりますけれども、それぞれの周辺状況を踏まえた位置を示しております。囲みの中にそれぞれの候補地の詳細を記載しておりますけれども、例えば、釧路市ですと現状は山林でありますとか、インフラの状況については、近くまで送電線が来ているのですが、整備は必要であると、上下水道も同様です。所有者については、一般財団法人と国が持っている。開発についても様々な法律上の規制がある、という状況であります。それぞれ、苫小牧市、留寿都村の現状について横並びで現状を記載しておりますので、後ほどご参考にしていただけたらと思います。

続きまして、6 ページ目以降、候補地を検討するに当たりまして、日本型 I R において、どういう要件が求められているかを整理させていただきました。まずは先般成立いたしました I R 整備法の第2条の中に、施設が定義づけされておりますけれども、国際会議場であったり、先ほどご説明させていただいた様々な発信のための機能、魅力増進施設、そうしたものを具体的な基準で、今後政令で定めていくとなっておりますので、今の段階で基準をこの場で示すことはできないのですが、これまでの国会議論で、例えば、横に記載しております国際会議場等の要件で言いますと、わが国を代表することになる規模が必要になるという答弁が繰り返されております。下段に参考で、わが国を代表する施設がどの辺りの規模なのか、例えば、国際会議場でありますと、東京国際フォーラムやパシフィコ横浜が収容席数で約 5,000 ということ。国際展示場でいうと、東京ビッグサイトや幕張メッセが大体 70,000 から 90,000 m² 規模の施設面積を誇っているということ。それら全てを満たすということではないのですが、こうした規模が一つの前提の要件になるだろうと思います。

続きまして、同様に区域整備計画を申請して、国が認定する際の基準ということで、I

R整備法に記載されておりますけれども、特に太字で下線を引いております11の2号、国内外の主要都市との交通の利便性その他の経済的社会的条件、ということが法律上明記されております。これも具体的な国会答弁のやり取りを見ますと、空港・港湾の立地状況が重要な判断材料になることが、国会で明示されております。また、大きな経済効果が見込まれることが言われております。これはおそらく投資規模がかなり求められる状況かと思っております。

続きまして、8ページ目、先ほどもご説明した、それぞれ財団所有であったり、民間企業の所有であったりするわけでございますが、国の考え方としては、民間、あるいは公有地の縛りはないのですが、施設所有者の変更を伴うものについては、カジノ管理委員会の認可を受けなければならないこと。これは右側で囲んでいとおおり、政府の見解としては、出来る限り公有地を利用するなど、複数の事業者が参入する、参入できる公平・公正な選定が出来るような、オープンアクセスを確保することが重要ではないかという見解も示されております。そういう意味では、民間所有の土地を今後どのような形で、公平性を保って、今後公募選定プロセスの中で、そうした手続きを担保していくかも大きな論点になるのではないかと考えております。

9ページ目以降は、それぞれ3地域の、さきほどの国の要件とも照らし合わせた上での状況について、整理をさせていただいております。北海道の場合、国が求める国内外の主要な都市との交通利便性となりますと、やはり新千歳空港が大きな交通結節点になるということで、資料の真ん中に記載させていただいております。そこを見ますと、3地域の中で考えますと、苫小牧市のアクセスが10分から15分なのに比べて、留寿都村90分、釧路市は空路を利用して100分、そうした状況でございます。空港以外にも例えば、主要な駅ですとか、港といったところを総合的に加味する必要がある、と考えております。

続きまして、10ページ目、これも関連資料は前回の説明時にもお示したところではございますが、昨年度道が行いました事業提案・RFCの結果でございます。誘致表明の3地域の中で、具体的にぜひともやりたいと、関心を示してきた状況を申し上げますと、苫小牧市が8事業者、留寿都村が1事業者、苫小牧又は留寿都が1事業者、特定していないのが1事業者でございます。具体的な地域を特定した事業者、苫小牧、留寿都のそれぞれその概要を下の図に載せましたが、これらを見ましても苫小牧への提案の投資額がおおむね高い水準にあるということ、先ほど申し上げた国を代表する施設ですとか、大きな効果ですとか、その辺で見ましても下段にMICEの施設面積、宿泊施設がございますが、苫小牧市の場合IR事業者の思いで言えばかなり大きな施設を考えられている、という状況でございます。

最後に、先ほどもご紹介した需要予測結果でございますが、下段にそれを前提とした税収効果を載せております。これを見ても苫小牧市が需要、税収共に高額であると、ここに客観的な数字を並べて参考にさせていただきたく、対応させていただきました。以上でございます。

■小磯 修二 座長

はい、ありがとうございました。今、道の方からご説明いただきました資料の中身について、何か質問ございますでしょうか。

■石井 至 氏

税収のところですが、これは納付金額に15%をかけた額というのは、北海道に入るのですか。

■榎誘客担当局長

ここに書いたのは、15%と3,000円をゲーミング売上高と参加者数をそれぞれ掛け合わせたものになります。この中で道に入っていくものを、地元市町村とどう分担するかは今後の検討になります。

■石井 至 氏

基本的には道に。

■榎誘客担当局長

そういう制度になっております。

■小磯 修二 座長

あといかがでしょうか。よろしいでしょうか。それであれば、この後誘致自治体から個別にご説明をいただいて、それに対して質疑という形をとりたいと思います。準備の関係から、このあたりで、一旦休憩とさせていただきます。開始につきましては、15時20分になります。

(休憩)

■小磯 修二 座長

それでは時間になりましたので、議事を再開いたします。

ここからは誘致を表明しておられる北海道内の自治体の担当者の方から、それぞれの取り組み状況について、お話を伺っていきたいと思います。このあとの進め方は、説明を15分程度、その後15分程度、公平を期するために、私から最初に共通の質問をさせていただいて、その後皆様に質問をしていただきます。そういう流れで進めさせていただきます。最初に、釧路市の菅野観光振興監、よろしく願いいたします。

■釧路市 菅野観光振興監

釧路市の菅野でございます。どうぞよろしくお願いいたします。それではお手元の資料に基づきまして、簡単にご説明させていただきます。

資料を1枚めくっていただきまして、釧路市の状況とIRの必要性というところで、釧路市の状況を簡単にご説明させていただきます。資料で「釧路湿原国立公園」の次に「阿寒国立公園」と書いてしまっているのですが、「阿寒摩周国立公園」の誤りでございます。すみません。ご訂正をお願いしたいと思います。当市は2つの国立公園ということで、雄大な自然に恵まれた「ひがし北海道」の中核拠点の都市として、様々なことをやっております。ただ、一方で、将来人口がやはり少子高齢化の波で減少しております。グラフにあるとおり今17万人を切りそうなところで、苫小牧市さんと人口が逆転している現象です。将来予測にあるとおり、11万人くらいに減るだろうと、このままの推移でいけばということですが。そうしたことで地方創生の取り組みなどもやっておりますけれども、そうした中での産業構造の変化ということで、当市の場合は水産業、あるいは農業等一次産業中心のそこに合わさる加工の二次産業といったところで成り立っている街でございますけれども、そうした担い手が減少している現状があり、観光という分野で、副次的に産業の構造を縦に散らしていく必要があるということで、今観光を一生懸命やっているところでございます。

次の4ページでございますけれども、観光産業のポテンシャルと、「ひがし北海道」というエリアとしてのポテンシャルとでご説明させていただきます。特に「ひがし北海道」で釧路市は、道東地域を管内自治体だけでなく、帯広、網走、オホーツク、根室、そうしたところと「ひがし北海道」の枠組みの中で、今、連携しております。アジア圏からの訪問先として北海道はずいぶん選ばれておりますけれども、東京・京都・大阪といったゴールデンルートからこの地方に、いかに観光客の方に来ていただくかが大きなミッションとなる中で、観光施策を活かしながら、特に阿寒湖温泉については、北海道はいずれもそうですけれども、アイヌ文化という大きな強みがありますので、そうしたアイヌ文化をしっかりと打ち出しながらやっていきたいと思っております。その下は産業の現状でございますので、後ほどご覧いただきたいと思っております。

5ページ目になります。観光地としての課題ということで、これは27年度になりますけれども、IR可能性調査時の課題として整理したのになります。大きくは6つほどありますけれども、一つは地理的要因で、先ほどの資料にありまして、やはり新千歳空港からの距離的な部分というのは大きなところなんです。これまで国や北海道さんに色々社会インフラの整備をしていただいて、道東道を含めて、空港、あるいは港湾、社会インフラが整ってきておりますので、この距離的なハンデをどう克服するかが一つの大きな課題になります。それと合わせて交通ということで、まさに今、道内の空港の民営化の議論が始まっておりますので、そうした航空ネットワークといった点から、この広い北海道を活かしていけるのかなと思っております。景気経済その他ということで、先ほど北海道さんからありまして、夏の時季の観光客の入り込みは高いということでもあります。

れども、11月、あるいは2月、3月、4月に、過渡期を迎えているということがありまして、そうした時季の誘客は非常に大事だと思っております。それからプロモーションに関しては、エリア毎にターゲットを絞って、特にインバウンドに関しまして、後ほど説明いたしますけれども、国の観光政策の大きなプロジェクトのエリアとして、色々指定されておりますので、アジア圏を中心に、欧米等の富裕層の取り込みを大きな目標としているところでございます。

6ページ目、観光産業の施策ということで、今申し上げました、国の施策に基づく地域指定を整理しています。一つは水のカムイ観光圏で、これは釧路市、弟子屈町で釧路湿原、あるいは阿寒摩周湖国立公園を中心とした広域周遊、滞在型観光の地域づくりを進めているところでございます。それから幅広い「ひがし北海道」という広域周遊ルート、これも観光庁さんの事業でございますが、「ひがし北海道」という形、富良野、十勝、知床、釧路というエリアで広域連携の取り組みを指定されています。それから、観光立国ショーケースということで28年の1月になりますけれども、長崎市、金沢市と釧路市がゴールデンルートから地方都市へ観光客を誘導していく、一つのモデルケースの自治体の取り組みとして、3地域が指定されております。私どももこの2020年、一つの短期的な目標として、インバウンドの対策をしっかりとやっていきたいと思っております。それから、国立公園満喫プロジェクトという、全国8つの国立公園がディステーションという形で、目的地として世界一級の国立公園指定という観光庁の事業になりますが、これも指定されましたので、こういった4つのプロジェクトの中で、現状2020年に向かって、特に富裕層をターゲットとしたインバウンド対策を私どもしっかりと施策に力を入れていくというところでございます。

それでは次の8ページになりますが、私どものIRのリポートのコンセプト、中身についてお話をさせていただきます。北海道さんの資料にあったとおり、私どもは可能性調査までは行政としてやっておりまして、その後は釧路の商工会議所、経済会が中心に、ひがし北海道統合観光リポート誘致協議会という経済界の組織が作られ、そこで構想的なことをやっているのですけれども、さきほど北海道さんのRFCにあったとおり、事業者提案は、直接は受けておりません。ただ、オペレーターに関しては様々なところにアクションを取っているところでございます。資料に戻りますが、長期滞在型・周遊観光の拠点、という形で、エコ型のディステーション・リポートの実現と書いてございます。こちらの地元の大自然、アイヌ文化を大切にしながら、世界の方から選んでいただける、ある程度ラグジュアリーのあるリゾート地として、しっかりと創出していきたい。これのカジノ機能という中のIR全体の機能は我々にとって非常に重要と思っております。これから釧路のIRを拠点として、道内を多くの観光客が周遊していただく、というのが私どもの大きな目標になってございますので、そうしたところの相乗効果を高めていきたいなと。想定される顧客層についてそこに書かせていただいておりますが、富裕層または一般層、私どもは、大規模なマカオだとか、そうしたところを想定しているのではなく、ヨー

ロッパ型の自然と時間軸を大切にしたい、そうした統合型リゾートを目指しておりますので、そうした中で、組み立てをしているということでございます。

次の9ページ、候補地ということで、ここは私どもの可能性調査で、当初は3ヶ所を想定していました。一つは阿寒湖畔のスキー場周辺。これは先ほど北海道さんの資料にあった候補地でございます。それから温泉ホテル周辺にある湖畔の周辺地域、そうしたところを検討しておりましたが、ひがし北海道統合観光リゾート誘致協議会の方でスキー場を一つの候補地として、具体的なプランニングをしているのが現状でございます。スキー場には、前田一步園さんという、阿寒の森を長く守ってこられた財団さんの所有地及び林野庁さんの所有地に位置しておりますので、先ほどの資料にあったような自然公園法であるとか、都市計画法上の開発行為であるとか、そうした制約は残っております。そうした点を今後はクリアしていく、ということでございます。その辺りを10ページにIRコンセプトと親和性、それから課題と考えられる事項ということで整理しております。これは後ほどご覧いただきたいと思っております。

次に11ページです。我々の想定するIRの施設、機能ということで、整備法が成立して、具体的なことは政省令に、となつてございますので、その辺りを見て見直しが必要なのかな、という点があります。大きくコンセプトとして、ヨーロッパ型のカジノ施設、そうしたものを目指していくのと、ホテルの宿泊機能につきましては、これまで国でも議論されているかなり大きなものではなく、既存の温泉街に一般層向けのホテルがありますので、IRでは富裕層狙いの、ある程度高額な、ハイグレードなホテルというイメージを持っており、200室程度にしてございます。それから飲食施設については、当然北海道特産のものも含め、食というところをしっかりと出していきたいなと思っております。

12ページになりますけれども、ショッピング、それからエンターテイメント、MICEというところで、中でもMICEは重要だと思っておりますので、規模感も別としてもしっかりとこういう機能を持っていきたいと思っております。12ページの資料、エンターテイメント施設の釧路の特徴として、今は北海道全体で白老の民族象徴空間の整備が行われて、そこは正にしっかりとアイヌ文化をいろいろな方に伝えていく。この阿寒湖温泉の特徴としては、アイヌ文化をご覧になる方だけではなくて、観光地として多くの方に訪れていただく、アイヌ文化に触れていただく、適切な場所だなど。アイヌ文化をしっかりとアカデミックに伝えていただくのは白老や平取といった地域であっても、阿寒湖温泉はそうしたエンターテイメント要素を持って、様々な文化を伝えていけるのではないかな、という想定をしております。

次は13ページになります。阿寒湖温泉との連携ということで、阿寒湖温泉はご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、スキー場がちょっと温泉街からは離れております。車で走ると2、3分程度、5分はかからないかもしれませんが、そうしたところとしっかりと温泉街をIRに訪れていただいた方に周遊していただくコンセプトを持ってございます。

次の14ページ、ここが私どもが大切にしているところで、「ひがし北海道」全体の観光資源との連携、「ひがし北海道」だけではなくて、周遊としては道内周遊ですけれども、やはり「ひがし北海道」地域の観光資源のところで、現状インバウンドの方々にも重きを置きまして、新千歳空港から入られて、あるいは釧路空港に入られて、阿寒や川湯、冬ですと網走の流氷といった流れも大きくございますので、こういった訪問客の方々にはしっかりと各地域を訪問いただく戦略というものを持っていかなければならないと思っておりますし、二次交通のアクセスルートの整備ということも非常に大きいのではないかなと思っております。

15ページに地元の協議会が作ったプランニングの絵として、ちょっと資料が小さくて申し訳ないのですが、スキー場の左側にこういった施設を配置して、ここにIRに必要な機能を全て網羅してございます。これはあくまで我々地域が、こういうリゾートがいいよね、ということで描いたことなので、事業者側がこうした提案をしているわけではありません。ただこういった資料を見せながら、各カジノの事業者さんにはこれまでも色々な形で接触させていただいてPRしております。

後ほど苫小牧さんからも説明があるかと思いますが、今年の2月に苫小牧市と釧路市と相互に連携しましょうという確認書を交わさせていただきました。協定書ということではなく、確認書ということで、こちら先ほどから申し上げますとおり、IRにお越しいただいたお客さんに北海道内を周遊していただくだけでなく、やはりしっかりと周遊滞在してもらうための機能をお互いに、機能というのはIRの機能ではなくて、例えばどこか一箇所に北海道の3ヶ所のうち、どこかになるということかもしれませんけれども、IRができた時に、そこにいらっしゃったお客さんが、次の場所でもしっかりとサービス提供を受けられるようなそういう連携をしていきたいと思います、という話を首長も含めてさせていただいて、確認をとってきたところでございます。当然交通の問題もありますけれども、様々な形で、連携することで、北海道の経済効果を最大限に高めていきたいと思っております。足早になりましたが、説明は以上です。

■小磯 修二 座長

はい、どうもありがとうございました。

ここから以降は少し質問させていただくことを考えております。最初に、私の方からこの後の自治体の皆さんに共通の事項について、質問させていただきます。最初に、IR事業についての地元の反応ということですが、先ほど経済界では地元も協力的で前向きに取り組んでおられるということでしたが、一方で反対する動きとかということも含めて、経済界や市民がどのような反応かお伺いしたいと思います。

■釧路市 菅野観光振興監

地域の住民の方々の反応という意味ですと、平成26年くらいからこのIR誘致を進め

てきまして、先ほど申し上げた釧路商工会議所を中心とする経済界がまずは動き出しの最初であったというのが実際のところでございます。その経過を踏まえて行政としても、観光にも大きな機能があるということで手を挙げさせていただいています。地域の住民ということでは、他の町よりは地域住民の説明会というのは少ないのかもしれませんが、27年に可能性調査をやった時に報告会をやらせていただきました。その他には北海道さんに、I Rに関するセミナーというのを何回かやっていただいて、そのときは沢山の市民の方に出席いただきました。この他に、市政懇談会というのを毎年春先、だいたい5月の末から6月の中旬、7月くらいまででしょうか、町内会単位である程度全町というわけにはいかないのですが、市長が町内会へ行きいろいろな話を聞く中で、このI Rの誘致に関してもしっかりと説明をさせていただいています。やはり、皆さんが言葉にされるのはギャンブル依存症の問題です。比較的、こう言うは何なんですけど、釧路はパチンコ屋さんとかそうしたものが多い町でもあります。そうしたことも踏まえて、心配される声があります。ただ、こういった自然をしっかりと外国人の方に伝えるべきだというご意見もいただいておりますので、まだそうした反対運動が起きているとか、そうしたことはないのですけれども、そうした心配の声は聞かれています。

■小磯 修二 座長

はい、ありがとうございます。

2点目に事業者との対話について、先ほどのご説明の中に事業者からのアクセスはあまりないということだったのですが、ヨーロッパ型のI Rを目指すという意味で、現時点で事業者との対話がどのような状況なのか、改めてお願いします。

■釧路市 菅野観光振興監

具体的に事業者からI Rに関する構想提案は受けておりませんが、これまで平成27年くらいからでしょうか、10社くらいの海外事業者と接触をさせていただきまして、そのうちの5社くらいは現地を見ていただいて、非常に事業者としても、その頃はまだ法律がなかなか決まっていけないという中で事業者の悩みもあったようですけれども、可能性として十分手応えを感じていただきました。昨年、これは協議会主催ですが、アイヌ文化との融合のために、先住民族がやっているカジノの事例も含めて実際に阿寒湖へお越しいただきまして、様々な意見交換をさせていただきましたし、市長自ら事業者さんの日本事務所を訪問したり、そうしたことを続けております。協議会がしっかりと実際に海外まで行って、オペレーターに会ったりといったコネクションはずっと取っている状況でございます。

■小磯 修二 座長

はい、ありがとうございます。

3点目は少し具体的な話になるのですが、実際にI R事業を展開していかれる際の用地ということで、先ほど道庁から説明がございましたように、今回のI R法のスキームの中ではオープンアクセスという公正公平な観点から事業者を選ぶことになっています。その場合、現在の釧路の提案の場所は、財団の所有する土地ということでした。そこをどのような形で、開かれた利用に向けて進めていかれるのか。その考え方をお聞きしたいと思います。

■釧路市 菅野観光振興監

先ほどご説明したとおり、候補地のエリアは一部前田一歩園という財団法人さんが持ってらっしゃいまして、私共行政もそうですが、協議会で候補地にする際に一歩園さんに賛否をとってはいません。まだ法律も決まっていないので、一歩園さんも判断しかねるところですけれども、一歩園さんからは地域が頑張ることに関して、さまざま協力していきたいということで、候補地として登録することに関しては特に問題ないと言われております。今後実際に整理をする上では、オープンアクセスということになれば、果たして財団の土地を市なりが所有することができるのか、ということも法的な位置づけも含めてやっていかなければならないなど。先ほど説明したとおり、自然公園法というかなり厳しい規制がありますので、そうした法的要件のクリアをどうやっていくかというのは、施設の整備の中身も含めてしっかりとやっていかなければならないと思っております。

■小磯 修二 座長

ありがとうございました。では、私から最後の質問です。先ほど北海道の方で、I Rの北海道としての基本コンセプトをこの懇談会で提示されましたが、それをお聞きになられて、釧路で提案しておられるI R、そこと親和する部分、あるいは相違する部分、双方についてお聞きしたいと思います。

■釧路市 菅野観光振興監

北海道さんのI R基本コンセプトについては、大きな部分ではまさにこの通りかなと思っておりますし、市の考えるコンセプトともひがし北海道の地域格差、地域偏在の是正というところを目指していただいているところは、全く問題ないなと思っております。

経済効果のシミュレーションについては、私共の可能性調査でちょっと低めにやっていますので、北海道さんの経済波及効果のほうが私共の試算より大きいのかなと、ある意味喜んでいただいております。

I R機能につきましては、問題はやはりM I C E施設の規模感になると思っております。釧路だけにかかわらず、ある程度規模感を持ってやっていくというのは重要な要素だと思っております。特に私共としては北海道として地域の固有文化であるアイヌ文化をしっかりと強みとして打ち出すことで、施設の機能、ハード面も当然そうだけれども、そこで提供さ

れるサービスの質というのも一級のものにしていただきたいと思います。そうでないと、富裕層なり、そうした方たちにしっかりとサービス提供ができないだろうなと思ってございます。先ほどお話もあつたとおり、私ども今観光をやっている上で、質の高いガイドサービスを非常に求められておりますので、そうした意味でいけば、IR施設を運営する人材の育成というのは最重要課題ではないかなと。サービスを提供する側がしっかりと役割をもってやっていかなければならないと思いますので、そうしたところもぜひコンセプトの中に入れていただけるといいのかなと考えます。

■小磯 修二 座長

はい、ありがとうございます。それでは、各委員の皆さんいかがでしょうか。特に順番は指定せず、ご自由に発言いただければと思います。いかがでしょうか。

■落合 周次 氏

私は前回最初に話をさせていただいたのですけれども、阿寒湖を見たときにドイツのバーデンバーデンがありますよね、阿寒湖というのはそういう感じに見えたんですね。ですから、北海道の考え方にあるように規模の要件がなければ、阿寒湖は本当に良いと思うんですよね。あとはアクセスの問題があるので、取りあえずは日本で三ヶ所ということなのですけれども、そこから先に色んな話が出てきた際に有力なのではないかと思います。

■小磯 修二 座長

感想としてのご発言ですが、いかがですか。

■釧路市 菅野観光振興監

実はバーデンバーデンはですね、うちの市長もそれから協議会のメンバーも実際に視察に行っておりまして、一つの理想の形ではないかと考えております。法律の中の施設の規模感が出るのかなというところが争点かなと考えております。

■小磯 修二 座長

あと、いかがでしょうか。

■小林 良輔 氏

私からは二次交通のところですか。資料にも書いていただいているのですが、一つは交通関係で、二次交通手段の未発達ということで、車がないと観光地を回れない、これは素晴らしい自然公園や広域的な観光資源があるのと裏腹のお話かなと思います。それともう一つは、IRの中にスキー場があり温泉があり、阿寒湖畔がある中での交通をどうしていくか、この二つについて、未発達ということでこれからいろいろと検討していく上で、非常

に苦勞されるのかなと思うのですが、その辺はどうお考えでしょうか。

■釧路市 菅野観光振興監

二次交通は I R に関わらず、釧路市だけではなく、ひがし北海道の大きな課題だと考えてございます。先ほど申し上げたとおり、現状では飛行機だと新千歳に、あるいは釧路、女満別、中標津に降りてくるということで、そこも地方空港で見るとやはり時間帯の問題もあります。それから陸路で行くと J R さん、あるいは鉄道、夏は中国も含めてインバウンドの方はレンタカーが非常に多くなってきております。現状何もないわけではなくて、道央に比べるとどうしてもひがし北海道に足を運ぶには一泊多くしなければならない。そのためには一泊してもいい機能が必要なので、バスだと時間帯の問題もそうですし、どう周遊して走っていくか、生活路線とは違う意味でのバス路線の整備だとか、今地域でも様々な取り組みをしておりますけれども、やはりバスの交通拠点みたいな形の動き方で、一カ所からさらに散っていくという形の中心として阿寒湖温泉が一つの拠点地域になって、そこからひがし北海道に展開していくシステムもありだろう、という議論をさせていただいております。ひがし北海道、我々のエリアとしてはそこが大きな課題かなと思っております。

8月1日からピーチアビエーションに飛んできていただいて、関西から来た方、釧路空港から降りて、バスにまずは乗っていただいて、またはレンタカーを借りる。その後どこに行っているのかな、というところも追跡調査しながらお客さまの動向について、どういう二次交通がいいのか、バスも乗り合いタクシーのようなものがあるのか、制度そのものを見直していかないとなかなか継続していかないなというのが一つです。

それから阿寒湖温泉地区におきましては、入湯税の超過課税を、今日座長でいらっしゃる小磯先生にご尽力いただきましてやっております、それを温泉街の周遊バスを財源にして動かしております。まりむ号と言う無料の循環バスでございます。I R の整備に当たっても、スキー場からは車で2~3分というところなので、今のそうした周遊バスもかなり頻繁に動いて、一台しかないのに10分ごとというわけにはいきませんが、ある程度の時間で動きますので、I R 施設から温泉街までのアクセスは、I R 事業者さんとの関わりになりますけれども、シャトルバスのようなことも十分考えられると思います。温泉街の周遊はそんなに大きな課題とは考えていません。

■小磯 修二 座長

よろしいでしょうか。はい、稲村さんお願いします。

■稲村 厚 氏

釧路市さんは、生活支援の福祉の面では、我々もよくお聞きをする非常に優れた支援をなさっていて、今回のギャンブル依存に関しても、きめの細かい施策に関してかなり参考

になるのかなと考えております。具体的に、もしお知りであればということですが、実際に現状生活支援の中で、ギャンブルの問題が登場してどういう風に解決したとか、どのくらいの案件があるのか、把握していらっしゃれば教えていただければと。

■釧路市 菅野観光振興監

私共、これは胸を張って言えることではないですが、地域経済の低迷から生活保護を受ける方が非常に多くなって、一つは太平洋炭鉱という大きな炭鉱が破綻したことから始まっているというところもあります。今、所管ではないので細かい数字というのは存じ上げてないのですが、大きく分けると当市の場合は高齢者の医療的な扶助が必要な方々と、それから若い世代で女性の単身のお子さんを抱えた方が多くなっているのが実態でございます。ギャンブル依存症に関して、パチンコでどのくらいとか、公営ギャンブルでどのくらいというよりは、我々は生活支援を受けなくてもいいように自立してもらう取り組みを今地域として一生懸命やっておりますので、多分依存症についてもきっかけになるようなところの整備だとか、そうしたところに関しては、地域の方々の団体はかなり長けていると思いますので、ある意味そうした依存症対策においても力を貸していただけないかと考えております。

■小磯 修二 座長

よろしいでしょうか。釧路市での生活保護者支援に私も実は関わっておりました。生活保護は釧路では非常に多くて、そこからの自立に向けた取組ということで、中間就労という独自の釧路モデルというものを作りました。それは地域の福祉の枠組みを超えた幅広い人々、農業者や医者や企業者などと一緒に自立に向けた道を作っていく仕組みで、これは今では生活困窮者自立支援法という国の法律による政策につながっています。そういう釧路地域の経験は、ある意味でギャンブル依存という問題に立ち向かう一つの地域の力としては、私は十分あるものと思います。ちょっと座長という立場で答えるのは違うかもしれませんが、参考までに。

道の方も、もし何かあればご質問をお願いします。

■本間観光振興監

このスキー場のところでIRをやる場合に、アクセス道路とかそのあたりの整備が何か必要になって、例えばそれを釧路市さんでやるのか、事業者さんがやるのか、そのへんのお考えがありますでしょうか。

■釧路市 菅野観光振興監

スキー場までのアクセスは、市道があるのですが、そんなに広い道路ではなく、相互交差するのがちょっと厳しいような道路幅です。もしIR整備となれば、やはり道路の拡幅

と、山間部に行くので急なカーブがあったということになると、例えばシャトルバスを運営するという事になれば、ハード的なインフラを整備しなければならないと思っております。その上で、その整備をどちらがやるのかについては今後の協議になると思えますし、今のスキー場の機能としても、道路が一つの課題でもありますので、ここはお互いの役割分担の中でできるかなと思えます。

■小磯 修二 座長

はい、よろしいでしょうか。あといかがでしょうか。町野さんお願いします。

■町野 和夫氏

先ほどの説明で環境の部分で自然公園区域の中という話がありましたけれども、環境面での影響等に関しては検討されていますでしょうか。

■釧路市 菅野観光振興監

これは地域の協議会とも話しておりますし、当然阿寒湖温泉地区が自然公園法の厳しい縛りの中で雄大な自然を守ってきたこともありますので、お手元の資料には木を切って林の中に建物を入れ込むような絵になっているのですが、実はこれぐらいの木を切るだけでも相当な許認可、あるいはそれに代わる環境保全の取り組みが求められることになります。私共としては環境的影響については、ターゲットが富裕層の方なのでものすごい騒音が出るだとか、そうしたことは想定しておりません。むしろ、多くの方が来ていただくことで、周りの自然環境にどんどん入っていつてしまったりですとか、そうしたことを今危惧しているところで、通常言われるような騒音だとか、音の想定はしておりませんので、あくまで自然を守るための規制の範囲でどこまでできるかなというところだと思います。

■小磯 修二 座長

はい、よろしいでしょうか。あといかがでしょうか。最後に3つの自治体合わせて意見交換する場もありますので、とりあえず釧路市からの質疑を終了させていただきます。菅野さんありがとうございました。

続きまして、苫小牧市です。町田室長、成田主幹のお二人から、お願いします。

■苫小牧市 町田室長

苫小牧市の国際リゾート戦略室の町田と成田でございます。本日はどうぞよろしくお願ひします。

苫小牧市は、皆さん工業都市としてのイメージが強いのではないかと思います。実はフラットで広大な土地がまだまだ存在しているという状況でございます。国際空港であり

ます新千歳空港の滑走路の3分の1が苫小牧市の行政区域で、更には国際港湾も擁しており、ダブルポートという呼び方をしておりますが、このダブルポートとフラットで広大な土地を活かした、I Rを含めた国際リゾート構想を本年6月に作成しまして公表したところでございます。本日は、その構想をもとに、限られた時間ですけれども説明をさせていただきます。担当の成田から説明させていただきます。

■苫小牧市 成田主幹

資料に沿って説明させていただきます。ダイジェスト版をベースにさせていただきます。途中で本編を見て頂きながら進めていきたいと思っております。この構想ですが、I Rの考え方の構想だけではなくて、国際リゾート構想というタイトルどおり、基本的には市全体に効果が波及していくことをまとめたものでございます。一つ目でございます。背景として、先ほどから話もありましたとおり、日本、北海道、苫小牧と全国的に抱える社会的課題が背景でございます。やはり人口減少、苫小牧市におきましても自然減が大きくなっており、ここをやはり克服していく。これが我々の構想においても大きなところでございまして、市民の皆様の理解を得るためにも、この背景をしっかり意識した上でこの構想をまとめてまいりました。これを克服するために、北海道におきましても苫小牧の強みもございまして、強みを活かしまして、いかに課題を解決するかにおいて、国が進めている観光立国を目指し、ものづくりの街である苫小牧市におきましても、この分野に対しても強みを活かす、役割を果たすことができるのではないかと。この構想、4年前から、可能性調査ということで市民の皆さんにお伝えしてまいりましたが、リゾート構想のチャレンジということで進めてきたところでございます。

二つ目は、I Rの効果を活かして社会的課題の克服をしようということですが、本編の15ページをご覧いただきたいと思っております。立地要件に対する苫小牧の強みをまとめさせていただいております。まずは左側にあるとおり新千歳空港と隣接していること、国際港湾と隣接していることがございます。インバウンド増加も大きな目標でございますが、こうしたところに隣接していることは非常に強みがあると考えております。また、札幌都市圏からも1時間圏内にあり、300万人の方がおられるということで、ここへのアクセスも重要なポイントであると思っております。さらに、自然豊かな広大な敷地であり、空港周辺にまだまだ大きな土地があり、ここも強みだと考えております。また、ものづくりの街ですので、企業群が既にございます。住宅等も集積していますので、こちらへのサプライヤー等も活用もできると思っております。さらに連携可能な近郊の観光地として、支笏湖、洞爺湖、登別、ルスツリゾートさんですとか、北海道の貴重な資源、財産である地域とI Rが連携するという強みもあります。

16ページになりますが、昨年度、民設民営の投資事業でございますので、投資意向調査を行ったところ、国内外の事業者併せて15社から提案をいただいております。

17ページ、苫小牧国際リゾート構想の7か条とありますが、構想を取りまとめる中で、

この7つのポイントを軸に取りまとめたところがございます。例えば4つ目、自然と共生した21世紀型リゾートとありますが、世界に発信できる施設でなければ国にも選定されない部分もあり、6番目のリゾートというだけではなく、イノベーションを創り出していくというものも1つの軸になっております。

続きまして、18ページです。I Rの全体像を、苫小牧の特徴と併せて取りまとめたものとなっております。ホワイトI Rという名称ですが、I Rができることによりまちづくりに対する効果や、北海道のゲートウェイ機能面では、インバウンドの誘客、そして道内の観光地に送客することをしっかりとできるのではないかと考えております。また、札幌圏からのJ R、バス等の交通ネットワークを更に強化していく可能性を持っていると思います。また、観光面ではダイレクトインバウンドと記載していますが、首都圏や関西圏が飽和状態になっているということで、直接北海道に入っただき、新千歳空港を核として、各地に飛び立っていただくことが特徴的であると考えています。また、イノベーションにより新しい産業を生み出していくということが、I Rを中心にできるのではないかと考えております。

21ページになりますが、国際リゾート構想の中で、最初の考え方ですが、強みであり、また必要性ということで北海道ゲートウェイエリアの都市圏の形成という形でまとめております。札幌都市圏という企業群、大学研究機関、人口の集中しているところと、人を動かしていくということも非常に重要であると考えております。また、一方でダイレクトインバウンド、お客様に入っただき、そして新千歳空港を中心に周遊していただくことで、既にある産業との連携も可能になることが特徴的であると考えております。

もう少し具体的に説明させていただくと、26ページ、トータルネットワークへの貢献でございます。新千歳空港等の民営化もあり、いかに飛行機を使って全道に行っただきかということもI Rとの親和性が高くなると考えており、例えば、先ほどお話しがあった釧路もそうですが、まずは新千歳空港からI Rに来ていただいてから、I Rのショーケース機能などで体験していただいたことを通じ、実際の本場へ行っただき、ワンストップで予約をして、周遊していただいて帰っていただく、ということも1つのプランとしてここに示しております。

続きまして、32ページ、空港から苫小牧市内へのアクセスになります。新千歳空港から国際リゾートエリアで申しますと、現時点でも15分程度で移動できますが、一つの考え方として、新たな道路を引くことによって10分を切るような時間でアクセスできるということもあります。将来的には交通公共機関を含めて検討が必要となってくると思います。また、高速道路に隣接している場所であり、インターチェンジからスムーズに入っただきという点で、この立地条件は非常にいい場所であると考えております。

36ページ、この構想の中でI Rだけではなく、新産業の創出、イノベーションリゾートというところで、人が交流しマッチングしていく場である、ハブになり得ることが発展していくと考えられることをお示ししています。例えば、食分野や医療健康、リカバリー

ゾート等といった新しい産業も発展させていくことができることをお示ししております。また、教育分野で、IR事業者からもいろいろな提案を受けておりますが、例えば、エンターテイメント一つとっても、人材育成を海外で実際にやられている事業者のプログラム等を持ってきて、国内の事業者と連携しながらやっていくことも必要になってくる、そうした機能をIRによって生み出していくことが言えると思います。

40 ページをご覧ください。これまでは全体の構想でしたが、ここはIRの機能について、基本コンセプトとして、大きく6つに分かれております。1つはMICE、これは一言でいいますと北海道らしいユニーク性をどう活かすということで、ユニークなMICE、ワールドクラスのエンターテイメントをしっかりとつくるということ、テクノロジーを活かすということ、それが環境との共生へつながるということ、そして苫小牧の特徴であるゲートウェイ機能につなげしっかりと達成すること。また、自然と共生するウェルネス機能、ここは後ほど触れますが、心と体を癒やす機能、そして、北海道の文化、食等のショーケースで構成されるという考え方でございます。

続きまして43 ページでございます。個別の機能ですが、MICEの機能で我々の考えているものでございますが、やはり特徴は国際空港に隣接したMICEを売りに出来るのが、各社の提案に基づいても、特徴だと思われま。また、食、農、自然、環境等の学会なども、アクセス性を活かしながら、リゾート型MICEという考え方で誘致推進する考えでありまして、例えば北海道のブランドを活用したダボス会議のような、経済的な国際会議のような、質を追って勝負していくことも、考えられると思っております。

続きまして、49 ページでございます。MICE機能と連携するのかもしれませんが、苫小牧市はスポーツ都市宣言をしております、スポーツにおける健康ですとか、ウェルネスにつなげながら、こういった写真に出ている施設も設けながら大きな催し物をしていく、という事例をここで示しております。

54 ページを開いていただけますか。基本構想での投資効果として、開業時想定投資効果が2,000~3,000億円、売り上げが年間1,200~1,600億円、雇用についても5,000~10,000人というところになっております。カジノ納付金につきましては、地方分は、高いほうで142億円ということでございます。

最後にギャンブル依存症についても、市として、教育分野、事業者に対していかにそれを実行させるかを選定基準の一つと考えます。我々この依存症の研究といいますか、そういう拠点作りを、財源を活かして作っていくことが重要かと思っております。すみません。時間ということですので。

■小磯 修二 座長

それでは釧路市と同じように私から最初に共通質問をさせていただきます。先ほどと同様にまずIR誘致に対して賛成・反対意見、また地元経済界など、どういう反応があったのか、まず伺います。

■苦小牧市 成田主幹

もともとは経済界の方から I R 誘致の話があり、実態としては 4 年前から動いてきたこともあります。具体的に言いますと 28 年から地元経済界を中心とした、苦小牧 I R 推進協議会も立ち上がって様々な P R の素材、例えば I R ってどういうものか、というパンフレットを作成して配布するといった活動をしております。

また、経済界だけではなく、市でも小さな単位での勉強会をこれまで何度も毎月のように開催し、I R を広げていこうと言いますか、啓蒙していこうという取組をしております。

市としても、昨年度セミナーを 9 回開催したり、出前講座を開催したりして、延べ 900 名の参加をいただいております。今後におきましてもこうした取組を続けていきたいと考えております。

反対につきましては、書面という形で提出されたことがあります。「カジノ（賭博場）誘致に反対する苦小牧市民の会」という会がございまして、その会から誘致反対の署名をいただいたということでございます。

■小磯 修二 座長

2 点目になります。これも先ほどと同じ質問になりますが、苦小牧の場合は、多くの事業者から関心を寄せられていて、先ほど 15 社から提案があったと説明がありました。具体的な I R 事業者との接触の状況や対話の進捗状況について、差し支えない範囲でお願いします。

■苦小牧市 成田主幹

先ほど申し上げましたとおり、I R を運営しているのは、海外事業者ということで、海外事業者から昨年度 8 社の提案がございました。その提案も必ずしもしっかりした調査をしたものではございませんし、またアイデア募集ということでもありましたので、さらに対話によって引き続き我々の考えですとか、実際のところ、投資額がどの程度になるのかといった話も含め、引き続き対話は続けさせて頂いております。

■小磯 修二 座長

3 点目の質問です。先ほどと同じく、オープンアクセスの確保について。苦小牧市においても現在提案の場所は民有地ですね。どういうふうオープンな形で進めようとしておられるのか、そのお考えをお聞かせください。

■苦小牧市 成田主幹

候補地とさせていただいております場所は民有地でございます、所有者という意味で

は非常にシンプルで一者が所有する民有地となっています。基本的にはIRが実現するということであれば、「市の方に譲渡して進めましょう」というような検討を進めているところでございます。

■小磯 修二 座長

では公有地へ転換して進めるということですか。

■苫小牧市 成田主幹

はい。

■小磯 修二 座長

分かりました。では最後の質問です。先ほどと一緒に、北海道IRの基本コンセプトの考え方と苫小牧の構想との違いや、あるいはここは共通するところがあるとか、北海道IRの基本コンセプトについての考えをお聞かせください。

■苫小牧市 成田主幹

基本的には大きくは変わらないと思っていまして、強みを活かしたところで言いますと、世界に類を見ないIRということを我々も思っておりまして、ショーケースにしてもアイヌ文化も構想に書かれているとおりでございまして、そういう強みを活かしていくこと、そしてエンターテイメントもワールドクラスのものにすること、また我々の一番の強みでありますゲートウェイの機能を道内だけではなく、東京、関西など国内にも送客できるような場所であるかと思っております。

さらに国に選定される上でも重要なポイントだと思われるMICEについても土地は十分に確保可能でございますので、北海道には大規模のものという意味では、稼働率も重要なことだと思いますけれども、提案の中でも国際会議場であれば5,000人規模くらいは回せるという提案もいただいておりますので、この辺りも強みとして訴えていきたいと思えます。

■小磯 修二 座長

ありがとうございました。一点だけ、先ほども釧路市さんからご説明ありました点で、整合性を取るために確認として、2月に釧路市と確認書を交わされています。その背景等についてお聞かせいただければと思います。

■苫小牧市 成田主幹

行政同士だけではなく、商工会議所など経済界の結びつきももともとございまして、このIRを進める中で、今までは3地域とも手を挙げながら動いてきましたが国の一定の基

準などが見えてきましたことで、やはりここは事業の中で北海道に I R を誘致した場合に周遊機能を我々もしっかりとつけていかなければいけない、という話もありまして、そこに先ほど釧路市さんからもありましたとおり、機能としてしっかり送客することを約束しましょうという機運が高まりまして、最終的には確認書で合意したということでございます。

■小磯 修二 座長

ありがとうございました。これはまた後で一緒の場で伺いたいと思います。

それでは皆さん、それぞれご質問をお願いいたします。

■石井 至 氏

R F I のところで 15 社から提案があったということですが、投資金額がだいたい 2,000 ～ 3,000 億円というお話ですが、その中で事業者さんがどれくらい負担していただけるのかというものはありますか。

■苫小牧市 成田主幹

具体的な数字の明示までは至っておりませんが、考え方としては半分よりも多く出すところから、半分くらい、又は 3 割などと幅がありますけれども、概ね 6 : 4 くらいです。その辺りは事業全体のバランスを見てのことだと思います。

■石井 至 氏

そうすると、2,000 ～ 3,000 億円の 4 割くらいは地元側で用意しなければならないかもしれませんが、これからの話でしょうが、それは今後検討していくということでしょうか。

■苫小牧市 成田主幹

事業者は民間投資で様々な活動をされており、地元と言っても北海道だけではなく、彼らから見れば日本全国が地元という感覚でもありますので、そこは全国規模の国内企業さんといろいろな接触をして話し合いベースでは我々もしっかりと折衝しております。

■石井 至 氏

ありがとうございます。もう一つ、環境アセスメントについてですが、全部ではないにせよ、これだけの面積だとするとアセスメントをしなければならないと思いますが、その点については R F I ではご提案はあるのでしょうか。

■苫小牧市 成田主幹

私どもの候補地も元々自然のところですので、自然と共生するというのがテーマであ

り、いわゆる法アセスが必要かどうかは面積によって違いますので、提案内容では法アセスが必要かどうかははっきりしませんが、ただ元々自然を壊さないように設計しなさいよ、ということは対話の中でも求めているので、それについては調査をする中で設計に組み込んでいくものと考えております。

■小林 良輔 氏

北海道 I R を考えた時には、道外の候補地との差別化という面で、イノベーションの要素は非常に重要だなと感じており、私は興味があるところでございます。

ここにも書いて頂いていますが、例えば地域住民のための先進的なまちづくりへの貢献ですとか、あるいは北海道の強みであります食を活かした新たな産業の創出ですとか、その地域が持続性を持って生まれ変わっていけるようなコンセプトや価値を期待したいと思っているのですが、この辺もう少し具体的な構想、あるいは計画のたたき台みたいなものはお持ちでしょうか。

■苫小牧市 成田主幹

一つの事例ですと、先ほど35ページにスマートシティが出てきますが、I R の収益をベースに新しい技術を活用しながら交通面や環境面、地域の商業、防犯を含めテクノロジーを組み込みながら快適な町の空間を民間出資の中で創っていけないか、これはまだ仮説の部分も含まれていますが、こういうものに収益を活用して創れた場合には、一つのモデルケースになると思っていて、この考え方を成功事例として各地に広めていくことも一つ考えられることではないかということでお示ししています。

■苫小牧市 町田室長

補足ですが、苫小牧市はものづくりの町ということで、現在も東京からベンチャー企業を呼んで地元の企業とマッチングイベントをやっております。東京苫小牧間は飛行機が回数も多く、ベンチャー企業が日帰りできるメリットもあって、それを今後こういう I R を使って全道規模のものにしていきたいという考え方もたたき台として持っています。

■河本 光弘 氏

2点、質問をさせていただきます。1点目は先ほど時間の関係で省略されたと思うのですが、「資料P.66のギャンブル依存症の研究機関及び教育、事業者選定等について少しお話しをいただければ」と思うのが1点です。もう1点は、苫小牧市には日本というか世界有数の企業も多く立地されているかと思いますが、それらの企業等からの I R に対する支援・連携、応援みたいなものの可能性があるのかどうか可能な範囲で教えていただきたい。

■苦小牧市 成田主幹

66 ページにつきましては、結論から言いますとこれを既に取り組んでいるかと言いますと、当然まだこれからということですが、ギャンブルで言いますと教育が大切であり、市ができることとして、ここに大きく掲げさせていただいたところがございます。

これはもちろん具体的にどのように、苦小牧市単独でできるのかという問題もございしますが、このあたりも、カジノだけではなくパチンコも含めてそういうところに対する考え方も重要であり、また事業者選定におきましても、カジノの依存症対策としてのプログラムを各社がかなり持っていることもありますので、この点については非常に重要視しているところでございます。

また、研究所と書いてございますが、ここは体制と研究項目とがポイントと書いておりますが、I Rにおける資金を活用したものを中心に依存症対策というものを行っていくことを目指すべきではないかという意味でここに示させていただいております。

■苦小牧市 町田室長

企業との関わりですが、まだ具体的に企業とはこういう話をしてはいないのですが、このたたき台の中で、例えば空港からI Rの候補地まで水素を活用した自動運転のバスを運行するとか、そういう細かい話も事業者との話で出てくると思います。実際、苦小牧市には自動車メーカーもございしますので、そういう話を今後してまいりたいと考えております。

■町野 和夫 氏

先ほどの共通質問の追加的な話ですが、地元の反対書面を受け取ったとの話がありましたが、どんな内容だったのか、どういった点への反対だったのか、差し支えない範囲で教えていただきたい。もう一つは道内の他地域への送客というのは結構難しいのかなと思っておりますが、もし先ほどのお話以上に具体的な案などがありましたら教えていただきたい。

■苦小牧市 町田室長

反対の書面については、やはりギャンブル依存症というところに焦点が当たっており、そちらを心配されている方々がI R誘致反対という署名をされています。一昨年に約3,000人超、今回約7,000人超で合計約11,000人。ただ、全部が苦小牧市民ではなく、道内他の市町村や本州の人も含められている状況です。

■苦小牧市 成田主幹

送客についてですが、難しい側面は確かにあるかと思いますが、空港機能を我々としては最大限活用できると考えており、I Rに来て頂く人数自体も多いですし、長期滞在の方もおられるでしょうし、そうした方々にいかに周遊いただくかを、パッケージにすると

か、IRに来て頂いた方が次にどこに行くというような、いわゆる収益を活用できるかできないかということも今後の検討事項としてはあるかと思いますが、こういったものを民間ベースの中でもっと深掘りというか、議論を進めていきたいなと思っています。

■落合 周次 氏

MICEの話が出ていますが、最大規模でどれくらいのを考えられていますでしょうか。それともう一つが、今、水素ガスの話が出ましたが、飛行場、飛行機の観点もあると思いますが、道内の各箇所に広げていくために、もっと利便性を高めるのにモノレールはどうなのか。空港直結が難しいかどうかその辺をお聞きしたい。

■苫小牧市 成田主幹

MICEについてですが、先ほど国際会議場は5,000席という数字を出しましたが、例えば展示場の部分は30,000~50,000㎡がひとつこの場所としては妥当ではないかという提案がございます。この構想の中でも同様に記載しております。これが国に対してどうなのかというのがありますが、一応そういう数字でございます。

モノレールについては、構想の中で札幌圏からの人の流れを沼ノ端駅からという考え方でございますが、まだ詰めるところがたくさんあると思っています。別な提案では国道からモノレールというのもございました。

■小磯 修二 座長

少し時間も経過しておりますので、最後に全体の質疑もございますので、特にならなければ、苫小牧市さんありがとうございます。それでは最後になりますが、留寿都村からのご説明に移ります。

留寿都村 浦城参事、お願いします。

■留寿都村 浦城参事

留寿都村の浦城と申します。よろしく願いいたします。この度はこのような機会を設けていただきありがとうございます。まず最初ですが、資料1の「留寿都村のIR概要」をご覧くださいと思います。この資料については、留寿都村が平成27年度に実施しました可能性調査報告書をもとにした資料となっております。

まず簡単に留寿都村についてご紹介します。3ページ目をお開きください。人口1,900人の小さな村であり、面積は120㎢、主な産業は一次産業、農業と観光となっております。なかでも観光は北海道最大規模のスキー場、遊園地、ゴルフ場を擁する国際的な観光リゾートであり、年間150万人の観光客、宿泊は40万人で、スキー場は雪質などニセコと同様国際的評価・定評があるところでございます。

留寿都村につきましては、他の周辺自治体とともに人口減少に伴い、主産業の従事者の

高齢化などが非常に問題となっておりまして、2030年の段階で人口の約4分の1近くがいなくなってしまうのではないかとされているところで、危惧しているところでございます。

4ページ目をお願いします。留寿都村のIR検討の背景としましては、統合型リゾートを導入することにより、地域振興を図りたく、また、他の地域と比較して有効な要素があることから、地元の民間企業等からIRについて誘致要望が平成26年度にあったところです。有望な要素としましては、四季を通じた豊かな自然環境、多くの観光客の訪問実績、知名度、利便性の高い交通アクセス、土地開発の柔軟性、こちらは国立公園などに囲まれていながら国立公園には指定されていないロケーションに位置する、ということになってございます。また、カジノ施設導入による負の影響の小ささと、既存のルスツリゾートの活用でシナジー効果が考えられるということになってございます。

6ページをお願いします。留寿都村の基本コンセプトで、こちらは小さい村とのことで、留寿都村を中心に後志・胆振地域と連携するIRを推進する構想を考えております。基本コンセプトとしまして、一つ目は北海道らしい雄大な自然を味わえる北海道独自の山岳型リゾートIRを推進すること、二つ目としまして、先ほど言いましたように広域的な経済圏・観光圏をもったIRとすることです。三つ目としましては、留寿都村の持っている郷土文化・産業資源の保全を重視し著しく失わないことを前提としております。端的に言いますと、これはゾーンニングをしっかりと行い、既存の住民生活を守りながら、影響を小さくしながら自然を著しく壊さないようなコンパクトなIRをイメージしているものとなっております。もともと小規模な自治体であるため、色んなインフラ等自分の村だけで完結することは難しいということで、広域的な連携は大前提だと考えております。

以降については、古い平成27年度の資料をお配りしているため、割愛させていただきまして、ページは飛びますが19ページをお願いします。こちら、主な留寿都村の課題ということで、この27年度調査段階におきましてもインフラの整備ということで、交通インフラ特に空港からの距離、ほかの周辺観光地との二次交通がネックとなっているところです。また、エネルギー、電気ガス、上下水道、またこういったものを整備するための財政面で、こちら小さな自治体については今後課題だということで、27年度の可能性調査の検討結果は、この段階で終了しております。この内容につきましては、既に可能性調査ということで、28年11月に住民説明会などで住民と共有をし、これからさらにみんなで考えていきましょう、とになってございます。

続きまして、資料2ですけれども、「地域統合型リゾートに関する構想」という資料をお願いします。こちらは地元のIRを推進する民間団体である留寿都村統合型リゾート誘致推進協議会が作成しました構想となっております、平成30年8月の直近に作成したものとになってございます。内容につきましては、先に説明しました可能性調査をもとに、課題解決に向けて地元協議会によって練られたものであり、既に運営しているリゾート施設との連携をベースとしたIRの構想となっております。

9 ページをお開きください。既存リゾート施設の現況となっておりますが、近年インバウンド増加の影響が大きく、日本人と外国人との観光客の比率は7：3となっております。また、2017 年はジャパンベストスキーリゾートとベストスキーホテルとダブル受賞しており、大変高い評価を受けている実績があります。

15 ページをお開きください。現在、既存のMICE機能としまして、2,300 人規模、これは施設全体の人数で、最大で受入できる一つの会場としては1,400 人、面積にして3,000 m²で、通年型MICEとして運営しております。過去にはG8洞爺湖サミットのメディアセンターや製薬会社等の学会、各事業者のインセンティブのある会議などを開催している実績があります。

18 ページをお願いいたします。ここからが留寿都の地元で考えております成長戦略の構想となっております。半径 50 km 以内の経済圏としますと、空知、石狩、後志及び胆振をおよそカバーし、だいたい北海道の人口のうち 330 万人のエリアということで、北海道全体の 62% の人口カバー率で、非常に優位に地域の開発を通じて今後多くの永住者を受け入れることが可能となるエリアでございます。その中で、人口減少となっていることで脆弱となっている生活インフラなどの立て直しが可能となると思っております。

20 ページをお開きください。北海道らしいIRをするならば、こちらの雪を利用したウィンタースポーツが外せないのかなと思っております。拡張性としましては、既存の18 リフト、37 コースを拡張することが可能な敷地が現在まだエリアとして残っております。

21 ページをお開きください。交通アクセスの向上としまして、現在空港からは90 分程度の距離ですが、このIRの開発位置から車で約10 分程度の位置にプライベート空港の建設を計画しているということで、地元事業者により滑走路2,000m級、幅45mのプライベート空港の計画をできるような敷地を持っていると伺っております。現在既に1機の運用により、観光での運用をしておりますが、道内の7空港民営化への経営参入も地元事業者が計画しております、道内民間7空港プラス1というイメージを想定しているものです。22、23、24 ページでご覧いただきたいと思っております。こちらの空港で考えますと、直接VIPが留寿都村のIRにプライベートジェットで乗り付けることが可能になると考えております。また運用しているヘリにつきましても、新千歳空港、丘珠において、ヘリにて送迎する際は約10～15分程度となっております。

ちょっと飛びまして、28 ページをご覧ください。また、先ほどの課題でもあります近郊の観光施設へのアクセスですが、広域での連携を考え、周遊バスの運行を定山溪、ニセコ、洞爺湖、北湯沢、千歳に向けて構想しております。特に倶知安町につきましては、将来的には新幹線が開業しますと車で30～40分圏内であり、各観光施設と連携し、運用するバスについては最大168台ということで、こちらが交通インフラとして必要なものかなということで、こういった構想におきまして二次交通の課題を解決したいと考えてございます。

29 ページをお願いします。プライベート空港を活用することで、道内13空港との連携

をしていくということです。こうした連携により北海道の端部にまで到達することが可能となり、北海道名産の海産物等を味わうグルメツアーなどが可能となります。

30 ページから 34 ページをご覧いただきたいと思います。こちらにつきましては、自然環境や通年型レクリエーション、また郷土料理や文化遺産といった様々なテーマコンテンツについて想定しているものです。後ほどご一読願いたいと思います。

39 ページをお願いいたします。すみません、35 ページです。計画用地につきましては、既存の施設とのアクセスとしてモノレールを想定しております。こういった形で厳格に I R 利用者の I D チェックなどを想定しております。

40 ページから 45 ページにつきましては、I R の構成のイメージということで、ご覧いただきたいと思います。38 ページにアイヌの神々の世界を表現となっておりますのは、現在村内事業者におきましては、プロジェクションマッピングなど北海道 150 年に関連した事業を展開しており、こういったところに貢献するようなコンテンツも書いてございます。

39 ページをお願いいたします。計画用地ですが、こちらは全体の面積のイメージ図としまして、今のルスツリゾートから北東に 1 km ほど離れています。

46 ページをご覧ください。建設計画のコンセプトといたしまして、こちらいろいろとお話になっている M I C E ですが、最大で 25,000 m² の拡張性を想定しております。全体の開発する総床面積につきましては、229,800 m² ということで、ゲーミング面積につきましては、6,800 m²、全体の 2.96% を想定しているものです。

47 ページをお開きください。こちらからは試算に入りまして、出典は The Innovation Group という海外のコンサルティング会社をお願いした市場性調査となっております。ゲーミングの収益は、745 億円から 1,024 億円、訪問客は、283 万人から 317 万人と改めて試算しなおしてございます。

65 ページをお願いいたします。こちらは税収の見込ですが、こちらの収入は、国の税収も含めた 30% で、入場料は 6,000 円となっておりますので、道の試算ではこれの半分になります。それで言いますと、ゲーミングで 111 億円、入場料につきましては約 87 億円程度となるのではないかなと思っております。いずれにしろ、またこちらの構想につきましては、今後地元でも詰めていきたいと思っておりますが、まだ業者の確定は済んでおりませんので、あくまでも構想となっております。

最後になりますが、留寿都村としましては、最大のメリットといたしまして、影響性の小ささ、また小さい村だからできる決定の早さ等、また反対の方が少ないということでありまして、こちらの開発する 3 地域に手を挙げさせていただければ、最も早くコンパクトな I R になるのではないかなと思っております。拙い説明で申し訳ありません。これで以上です。

■小磯 修二 座長

どうもありがとうございました。それでは、私から最初にいくつか質問をいたします。説明の最後で反対がないとおっしゃっていましたが、地元の住民、経済団体の反対の声や意見はなかったのでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

はい、こちらの協議会の構成メンバーは観光協会、商工会、建設業協会殆どの事業者が入っております。また、関係者というのはほとんどの方が入っており、直接的な反対の声はこれまで聞いておりません。また、I Rについて、毎年11月から12月に村政懇談会で村長が各地区、町内会単位で回っておりまして周知を深めている状況となっております。

■小磯 修二 座長

はい、それから2点目です。事業者との対話ということで、今回ご提案いただいた内容は海外のコンサルが作成した資料ということでしたが、事業者との対話というのは今どの程度進んでいるのでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

具体的に、非公式も含め今6社程度接触しているところですが、北海道のR F Cに至るところまで言及していない業者や、また直接的な投資効果を見るのではなく、ただ現場だけ見に来ているという方もいらっしゃるのでは、これからになるのかなと思っております。

■小磯 修二 座長

今回の INNOVATION GROUP に提案があった事業者から発注されたのですか。それとも村で発注されたということですか。

■留寿都村 浦城参事

こちらは、民間の事業者が発注しまして、コンサルタントがついている状況です。

■小磯 修二 座長

民間事業者が発注した内容を今日ご説明いただいたということですね。では、併せて質問しますけれども、今後詰めていくと先ほど説明がございましたが、このコンサルからの提案書を今後、地元の協議会の中で検討していくという理解でよろしいでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

こちらは、あくまで民間事業者の構想になっておりまして、先ほどの釧路市さんもそうですが、まだオフィシャルなものとしましては、可能性調査で止まっている状況です。今後、北海道がI R誘致を表明していただいて、必要となれば、当村としてもR F IやR F

P等を進めていけるのかなと思っております。

■小磯 修二 座長

これは先ほどから共通して質問していますが、オープンアクセスの問題です。留寿都村の今想定している場所は民有地ですね。事業の公平、公正な選定に向けて、どういう取り組みを今後されていくご予定があるか、うかがいます。

■留寿都村 浦城参事

I R整備法の中でどこまでの廉潔性というものが必要となるのか把握していませんが、こちらは町内の事業者1社が敷地を持っているわけですので、そちらとの協議は友好的に進めたいということであって、公有的な資産にするかしないかという協議はこれからになりますけれども、しなければならぬという形になれば今後協議を進めていきたいと思っています。

■小磯 修二 座長

まだ、そこまでの議論になっていないということですね、わかりました。

最後に北海道全体の基本コンセプトについてお聞きになったと思いますけれども、そこと現在留寿都村で考えておられるコンセプトとの違いや親和性について、お考えをお願いします。

■留寿都村 浦城参事

北海道の持っているコンセプトにつきましては、ある意味最初のうちがもっている社会的影響の小ささ、そして効果が最大限になる、という村のコンセプトに変わらないと考えています。施設整備含め、インフラ含めそれだけで終わるものではないと思います。人口減少等もそうなのですけれども、I Rが立地した場合におきまして、そこで働く就業する方については、30分圏内というのは当然通勤可能圏内ですから、人口増など含めて羊蹄山麓の町村については波及効果が大変高いと思っています。

■小磯 修二 座長

私からは以上ですが、皆さんからいかがでしょうか。

■町野 和夫 氏

少し細かい話ですが、予測について、大変細かく出されているので、興味深かったのですが、民間のコンサルタントが算出したということもあってか、いろいろな想定が道の試算と違って、例えば、Win Per Visit（1訪問ごとのプレイヤーに対する平均勝利額）百何十ドルとか、結構高い金額になっていたり、国内の旅行客が北海道で調べた数字

と違ったり、そのへんの数値が高めの印象を受けるのですがいかがでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

北海道のものはある一定条件で3地域並べておりますので、イーブンなものだと思っております。こちらの試算につきましては、今現在コンサルタントがMGMやラスベガスサンズ等、実際に運営しているカジノ事業者のデータをもとにした距離、母数また総生産といったものを使って別の視点からアプローチした試算の一部として捉えていただければと思います。

■小磯 修二 座長

よろしいですか。はい、では小林さん。

■小林 良輔 氏

すいません、聞き漏らしたのかもしれませんが、この構想の中に飛行場、滑走路の整備が入っておりますが、2,000メートルでしたか、これは事業者が整備することになるかと思うのですが、これは相当お金がかかるような感じがします。いろんな管制塔とか、施設を含めて、滑走路の整備に付帯するようなものも含めてだと思いますが、これはいくらぐらい事業費を見込んでいるのでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

こちら建設費で約120億円、付帯設備で約30億円程度で積算しております。プライベート飛行場としての整備になります。

■小林 良輔 氏

そんな金額でできるんですか。

■留寿都村 浦城参事

あくまでプライベート空港の一部ということで試算しています。

■小磯 修二 座長

あといかがでしょうか。はい、河本さんお願いします。

■河本 光弘 氏

冬のスキーや夏もある程度観光客の入り込みが見込めるとは思いますが、そのほかの季節というのはどのように魅力付けを考えていらっしゃるのでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

今ある遊園地、ゴルフ場、またプールのほか、I Rについては商業施設ということで、こちらはエンタメ施設、シアター施設ということで考えており、資料でいきますと40~46ページを見ていただければと思います。現在、考えているものは、5つ星ホテル、展示会場、劇場、ナイトクラブ、また、リゾートビレッジにつきましては、スキー場のゲレンデから直結しまして、エクストリームスポーツ、ロッジという形で、冬に限られてしましますが考えています。また、夏場に関しては、マウンテンロッジ、コンドミニウムという別荘地、避暑地というイメージです。

■河本 光弘 氏

春と秋の対策というのはどうでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

そこまではまだ構想を詰められていません。

■小磯 修二 座長

はい、あといかがでしょうか。はい、稲村さん。

■稲村 厚 氏

村内に、現状ギャンブル依存等の問題は存在しないというイメージでしょうか。それと、私申し訳ないですけど、行ったことがないので、村内にパチンコ店のような施設があるかどうか教えてください。

■留寿都村 浦城参事

残念ながら、パチンコ・パチスロ店等は1店もございません。信号機が5つしかないような小さな村ですので、あまり遊ぶ場所といったものは少なく、私の知る限りではギャンブル依存症の方は0人ではないかと思っております。

■小磯 修二 座長

はい、あといかがでしょうか。道からはよろしいですか。

■本間観光振興監

1点だけ確認したいのですけれども、村で作られた概要の19ページにインフラ整備に係る検討がありますけれども、この中で、インフラ整備主体に道が入っているんですが、これは、どの部分が道で整備されると想定されているのか。

■留寿都村 浦城参事

水道施設など一定規模を超える場合、道の代執行等をお願いしたいと思っていますのですが、こういった一般の公共施設でどれだけの財源が必要なのかと。小さい市町村であると代執行等道営事業で作っていただいて、村の方で負担金を支払うような制度があると思うのですが、そうした形で、一定規模を超えるインフラの整備について協議が必要かなと思っています。

■榎誘客担当局長

後段でご説明いただいた協議会の資料について、民間の提案とはいってもこういう場でご説明いただくということで、村も同じような方針だと思うのでお聞きしたいのですが、パートナーを1企業、加森観光さんに限定されている状況で、一方でIR整備法案に基づく今後の公募プロセスというものがございまして、先ほども少し話題になりましたけれども、公平、公正な選定、公募という手続がある中で、仮に留寿都村さんの候補地を道として選んで、そこで民間事業者を公募する場合、込み入った話になりますが、例えば、加森観光さんとパートナーを組まない事業者さんが参画してきた場合に、そのようなことも留寿都村としては想定オプションの範囲内なのか、答えられる範囲でお答えいただけたらと思います。

■留寿都村 浦城参事

今現在としましては、もしそうした事業者さんがいたら、当然交渉になってくるとは思うのですが、もちろん、そういうこともありうると思っています。

■小磯 修二 座長

先ほど私がお尋ねしたオープンアクセス、そこは現在の事業者を前提にというお話があったのですが、そこはどうでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

実際に1社で、土地の所有者としての形で関わることになりますので、仮に0という形にはならないとは思うのですが。

■小磯 修二 座長

今の榎局長の質問に対するお答えは、その考え方で理解していいということによろしいですね。はい、わかりました。

ほかにいかがでしょうか。よろしければ、時間も来ておりますので、個別の留寿都村への質疑は終わります。どうもお疲れ様でした。

(3)意見交換

■小磯 修二 座長

引き続き、釧路市、苫小牧市の皆さんにもご着席いただいて、ご一緒に意見交換をという形で進めさせていただきたいと思います。皆様方、ご一緒にこういう形でお集まりになるような機会はこれまでにありましたでしょうか。今後の誘致に向けて、どこを優先的に進めていくのかという北海道にとっての重要なテーマについて、それぞれの個別の自治体のお立場でそれぞれ進められている中で、どういう風に考えられているか、折角なので少し具体的なお話をお聞きしたいと思います。先ほど釧路市から2月に苫小牧市と確認書を交わされたという話があって、その経過は少し苫小牧市からもありましたが、これはある意味で北海道全体の戦略に向けた、そういう問題意識で動かれたのではないかなと推測するのですが、そのあたり釧路市さんからお願いします。

■釧路市 菅野観光振興監

我々釧路市の場合は、先程来申し上げているとおり、観光に関しては、一つの市、町という単位でものごとを考えられないだろうなということで、大きな枠組みで、現状釧路の阿寒だけを見ても、インバウンドの方は連泊していらっしやらない。平均すると延べ宿泊で1.02泊とか1.03泊ということで、一人の方が何泊もその地域に行こうということではない。ただ、北海道全体で見ると、例えばインバウンドの方が10日間いらっしやったりとか、あるいは一週間いらっしやったりということは大きな動きとしてあって、それはIRと連動していこうかなと思っております。そうした意味で、私共3地域は民間事業者さんも北海道全体の連絡協議会を持っていますし、何度も北海道さんとの協議の中でも同席しておりますし、連携を取って、お互いがライバルというよりは、いかに相乗効果を上げていくかという中で、選定される法律上は、本当は3カ所いっぺんにできれば一番いいことなのかもしれないですけども、1カ所という制約がついているのであれば、この3地域が上手く連携して、地域だけではなく北海道全体に、富裕層たる外国のお客様が経済活動をして落としていかれるお金を北海道全体で回していくのが非常に重要なことだと思っておりますので、その辺も含めて北海道さんにはぜひ頑張ってくださいと思っています。

■小磯 修二 座長

苫小牧市さん、いかがでしょうか。

■苫小牧市 町田室長

もともと釧路市さんとは同じ港湾都市として、あるいは製紙工場がお互いあって、あとはアイスホッケーつながりということで、友好的にこれまでやらせていただいております。今回IRということで、北海道にまずはIRを誘致したいというお互いの気持ちが一

致するものでしたので、そこは広域連携も含めて、お互い協力してやっていきたいと思いますといういきさつで今回こういう経過になったということでございます。

■小磯 修二 座長

確認書の内容はどういったものでしょうか。

■釧路市 菅野観光振興監

一番目には北海道 I R の実現になります。それと周遊させる。お互いの地域をいかに周遊していただくか。その次に I R に来ていただいたお客さまが釧路や苫小牧の I R 施設だけにとどまるのではなくて、その連携する地域にも、イメージとしてはセットで宿泊予約ができる、例えばお互いに宿泊機能をもっているのであれば、I R 施設に泊まって I R の機能を楽しむだけではなくて、連携する地域にも泊まっていたら、そうした相乗効果を I R の運営事業者さんにやっていただきたい。という意味も含めて連携していきましょう、事業者に働きかけていきましょう、ということで進めております。

■小磯 修二 座長

基本的には北海道全体の立場に立って、やはりお考えであるということであろうと思います。この辺の動きは留寿都村としてはどういうふうにお考えでしょうか。

■留寿都村 浦城参事

そうですね、今回 I R の誘致表明につきましては一番の後発組という形になりまして、また元々小さい村ですので、ただ思いは民間レベルでも、道の連絡会議などでお会いしている中でも、北海道にはぜひとも、という形での意気込みは持っております。ただ、具体的な連携の協定というか確約はしていませんけれども、今後それは必要となると思っております。

■小磯 修二 座長

今後必要になるということですね。

折角の機会ですから、それ以外に各委員の皆さんから、個別でも結構ですし、地域を指定してでも結構ですので、いかがでしょうか。

■本間観光振興監

先ほど苫小牧市さんのところで質問できなかったのですが、確認だけさせていただきたいのですけれど、苫小牧市の構想の中の 32 ページで、アクセス整備方針というのがあります。アクセス道路とかダイレクトインターチェンジとか B R T の活用とあります。このへの整備は事業者の方で全部やるような、そんなイメージでよろしいでしょうか。

■苦小牧市 成田主幹

このアクセス整備につきましては、基本的には事業者の提案に基づきまして、一つの方向性ということでありまして、それを同時に全部やるかどうかは明確ではございませんが、基本的には最低限のインフラが必要だと思っております。そこにつきましては、市の考え方は、基本的に事業者に負担していただくことで、そのようなスキームができるかどうか、既にそうした話も進めているところでございます。

■小磯 修二 座長

ほかにございませんか。はい、石井さんお願いします。

■石井 至 氏

苦小牧市さんに質問です。IR候補地の側に報道によると、東京の某社のオーナーが経営している企業が富裕層向けのリゾート開発をやっておられるというふうに聞いたのですが、それと今回のIRとの連携・連動はあるのでしょうか。

■苦小牧市 成田主幹

今、現段階で明確ではもちろんないわけですが、基本的には隣り合わせのエリアでもありますので、話としては色々な意味でコミュニケーションを取っております。この構想にも示しておりますけれども、34ページにあります。このエリア全体としてまずIRがあって、そのIRの右のところには具体的な民間企業の計画がございますので、こういったものをトータルとして将来的に連携をしていきたい、という方向でございます。

■小磯 修二 座長

あとはいかがでしょう。よろしいでしょうか。ちょうど時間になってまいりました。今日は3自治体の皆さん本当にお疲れさまでした、ご協力いただきまして感謝申し上げます。

この懇談会、最終的に道の方で優先的な候補地の考え方をまとめていただく上で今日の意見交換の内容や経過を踏まえて、事務局に整理を進めていただくということでお願いを申し上げます。

今日予定されていた議事については以上でございますので、この後の進行を事務局にお返しいたします。

3 閉会

■本間観光振興監

今日は大変ありがとうございました。本日、皆様から頂戴したご意見等につきまして、事務局にて整理させていただきまして、次回の懇談会で優先候補地の考え方を示させていただきますと思っております。

次回の日程でございますけれども、事前に皆様から予定を確認させていただいております。10月17日（水）の開催と考えております。時間等はまた後日お知らせしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。

また、次回のテーマでございますけれども、「社会的影響対策の方向性」を中心にご意見をいただければと考えておりますので、重ねてよろしくお願いいたします。本日は本当に長時間ありがとうございました。（了）